

脳をモデルとした人工知能は、ノード群の発火というものを基盤に情報処理をしていくものです。発火しているかないかで、全ての結果を管理します。センサー情報の認識も、思考や行動の発現も、ノードが発火しているかどうかを基盤にしています。

ノードの発火は、重み付き投票による連想と、パターンマッチングによる全件からの選択によるものがあります。

ノードとして想定されるのは、データの固まりがそれですが、プロセスもあります。解析すること、シミュレーションすることで、動的にデータを生成しなくてはならないことが多数あるからです。目標が与えられると解析のプロセスが選択されます。そうして、結果はまた連想やパターンマッチングの対象になります。パターンマッチングはパラメータを指定されて実行するコマンドという形式を取るでしょう。

発火は基本的に、全てのノードが対象になりますが、意識下の思考では、意識が対象としているノード群を管理しています。それは有限の数のノード群です。全てのノードを対象にはできません。そこで、刈り込みが行われ、連想もパターンマッチングの大本は管理されて行われます。意識下から無意識下へ連想が至り、大局では全ノードが対象になります。

連想は連想関係を表現するノードとこの連想元のデータノードへのポイントで創られているでしょう。連想で、次々とデータノードは発火していきます。一方で、パターンマッチングを実現するノードは、プライミングされた・・・優先順位に並べられたマッチング管理ノードがあつて、管理ノードからデータノードをポイントしていて、マッチング管理ノード全件が順次マッチングされていく・・・ということになるはずです。それで、データノードが発火していく。

発火は遂には効果器に至って、行動が引き起こされます。その間に、感情が発生し、思考が発生し、記憶がなされて、知識の組織化がなされるのです。